研究報告（調査研究）

富山大学の初年次教育の改革に向けての一考察

谷井一郎

初年次教育とは、大学 1 年生が大学での学修や生活をスムーズに始める手助けとなるよう構成されたプログラムであり、現在日本の大学の 9 割以上が取り入れている。本稿では、初年次教育の目的と定義を述べ、その中に含まれるべき内容について解説し、全国の大学における初年次教育の実施状況と本学の実施状況を示し、最後に、富山大学の初年次教育の方向性について提案する。

１．はじめに

初年次教育は、導入教育ともよばれ、現在全国の大学で取り入れられている。その背景には、少子化による大学進学率の向上によって入学生の学力レベルが多様化し､学力差のある学生に対して大学･教員側の対応が求められている事情がある。富山大学の IR 分析によると、入学時から卒業時までの学業成績の変化を調査した結果、入学時に成績不振に陥った学生はそのまま卒業時まで成績が低迷することが明らかになった。この分析から、入学後の早い時期に大学の学修環境にうまく適応し、モチベーションを高めることができれば､その後の学修を円滑に進めることが期待できる｡初年次教育には、高校から大学への教育環境の変化に適応して大学生らしい学修者となることを促すためのプログラムが含まれている。他大学の初年次教育の取り組み方を調査すると、実施形態、内容ともに大学によって様々である。実施形態としては、全学的な組織で運営しているものと学部・学科ごとに運営しているものがある。内容的には、全学的に同一内容で実施しているものと学部ごとに異なる内容を実施しているものがある。また、必修科目か選択科目かの違いもある。このように大学や学部・学科によって初年次教育の取り組み方には多様性が見られる。本稿では、標準的な初年次教育とはどのようなものなのか、どうあるべきなのかについて考察する。

２．初年次教育の目的と定義

全国的に初年次教育を必修とする大学が広がった要因のひとつは、高等教育政策において大学をこれまでより教育を重視する場へと変革する変化があったことが挙げられる。高等教育全体の中で初年次教育をどう位置づけているかに関して、中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて

（2008）』の中から初年次教育の重要性に触れた箇所を抜粋する。「人生の新たな段階、未知の世界への移行を支援する取組として、初年次教育への注目も高まってきている」としたうえで、初年次教育は、「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学修及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」あるいは「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」として説明される。さらにその内容については、「我が国の大学の、初年次教育においては、レポート・論文等の文章技法、コンピューターを用いた情報処理や通信の基礎技術、プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法、学問や大学教育全般に対する動機付け、論理的思考や問題発見・解決能力の向上、図書館の利用・文献検索の方法等が重視されている。今後、我が国においても、学部・学科等の縦割りの壁を越えて、充実したプログラムを体系的に提供していくことが課題となる」、とかなり具体的な記述がある。
2014年答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』では、「新たに時代を見据えて学力の三要素（「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等の能力」、「主体的に学修に取り組む態度」）を踏まえた教育改革を進めることが重要である」としている。さらに、「初年次教育は、高等学校で身に付けるべき基礎学力の単なる補習とは一線を画すべきであり、高等学校教育から大学における学修に移行するに当たって、大学における本格的な学修への導入、より能動的な学修に必要な方法の習得等を目的とするものとして捉えるべきである」、と記されている。すなわち、高等学校の学び直し（リメディアル教育）ではなく、自立的な学修者となるための教育としている点が強調されている。2017年度に発表された新学習指導要領では、子供たちの「生きる力」を育むという目標を掲げ、育てたい資質として「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の３つの柱を掲げている。この中で特に、「学びに向かう力・人間性」は、「課題解決」に向かって社会の中で「21世紀を生きる」強い意志、すなわち社会での「自立」を強化することを教育の役割としたものである。ここから読み取れるのは、高等教育政策の中で初年次教育は高校から大学の学修への円滑な移行目指すものであり、単なる知識やスキルの習得を目指すものではなく、学生が自立した学修者となるための能動的態度や学修方法を身に付けさせることに重きが置かれているのである。

３．初年次教育に含まれる内容

全国の多くの大学で取り組まれている内容を分類するとおよそ以下の通りである。

（１）学びへの導入

- 大学での学修への動機付け
- カリキュラムや3ポリシーの理解

（２）スタディ・スキル系

- 情報リテラシー（ウェブや図書館を利用した情報の取得とマナー）
- ノートテイク
- アカデミックライティング

・　プレゼンテーション
・　グループ学習

（３）スチューデント・スキル系
・　社会の構成員としての自覚・責任感
・　大学生活のルール・マナーとリスク

（４）キャリアデザイン
・　自己分析・自己理解から将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付けを行うためのプログラム

（５）自校教育
・　自大学への帰属意識向上のためのプログラム

（６）専門教育への導入

上記以外に以下の内容を取り入れている大学もある。

（７）人として守るべき規範を理解する
（８）大学の中で人間関係を構築する

こうしてみると、中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて（2008）』に記載された事項を網羅した上で、自校教育や専門教育への導入等を取り入れていることがわかる。前述したように、高校までに身に付けておくべき学力の不足分を補修する、いわゆるリメディアル教育は理系学部で実施している大学が多くあるが、これは初年次教育には分類されない。なお、教育方法として、能動的・主体的学修を促進することが重視され、アクティブラーニング、少人数グループ学習、体験学習を取り入れる事例が多い。

４．全国大学の初年次教育の現状

文部科学省『令和元年度の大学における教育内容等の改革状況について』によると、2019 年（令和元年）10 月の時点で全国の大学のうち 97.3%（722 大学）で初年次教育が実施されている。その取組内容としては、「レポート・論文の書き方等の文章作法」（実施率 91.4%）、「プレゼンテーション等の口頭発表の技法」（85.2%）、「大学内の教育資源の活用方法」（82.6%）「学問や大学教育全般に対する動機付け」（81.8%）、「将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付け」（79.5%）、「論理的思考や問題発見・解決能力向上」（68.2%）が上位を占めている。ここからも全国の大学がどこに重点を置いた初年次教育を推進しているのかがわかる。

具体的内容	2015 年度	2019 年度
レポート・論文の書き方等の文章作法を身につけるためのプログラム	88.6%	91.4%
ノートの取り方に関するプログラム	63.7%	65.5%
プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身につけるためのプログラム	82.3%	85.2%
学問や大学教育全般に対する動機付けのためのプログラム	76.5%	81.8%
論理的思考や問題発見・解決能力の向上のためのプログラム	64.5%	68.2%
将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付けのためのプログラム	77.6%	79.5%
社会構成員としての自覚・責任感・倫理観育成のためのプログラム	48.7%	51.5%
メンタルヘルス等、精神的・肉体的健康の保持に関するプログラム	38.1%	41.1%
学生生活における時間管理や学修習慣を身につけるためのプログラム	56.8%	60.2%
大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身につけるためのプログラム	75.9%	82.6%
自大学の歴史等を題材とした自大学への帰属意識の向上に関するプログラム	42.0%	47.2%

表１.「令和元年度の大学における教育内容等の改革状況について」より

このような初年次教育の広がりの背景にあるのは、少子化がもたらす学生の多様性が学力レベルだけでなく意欲・動機レベルにまで及んでいて、大学側がそれに対応する必要性に迫られているという現状がある。特に意欲・動機レベルの低い学生には、受動的な学修から主体的・能動的な学修へと指導する教育に力点が置かれる。そのためには「将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付けのためのプログラム」であるキャリア教育を導入して目的意識を高めることが重要視される。大学設置基準の改正により、平成 23 年度から大学教育の一環として社会的・職業的自立に関するキャリアガイダンスの実施が義務化されたことも各大学がキャリア教育に力を入れた理由であろう。なお、これまでのキャリア教育は主に高学年に実施されるキャリアガイダンスとインターンシップに力点が置かれていたが、近年においては初年次においては自己分析をもとに自己の将来像を思い描くプログラ

ムであるキャリアデザインの重要性が認識されている。

５．神戸大学の取組

神戸大学の「初年次セミナー」の実施形態と内容は、本学での初年次教育の参考になると思われるので紹介する。「初年次セミナー」が開設されたのは 2018 年で、旧七帝大（北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学）と比べてかなり後発である。すでに初年次教育を導入した他大学が長年直面してきた課題やその解決に取り組んできた試みを参考にして、神戸大学の実情に合わせた実施形態と内容について学内議論を経て実施に至ったものである。主要国立大学との違いを挙げると、第１に、初年次教育の担い手が全学共通教育あるいは教養教育を実施する組織ではなく、神戸大学では学部が主体となり、専門科目としてカリキュラム上位置付けている。これと関連して、主要国立大学ではクラス編成は学部横断的（学部混成クラス）だが、神戸大学では自学部学生のみのクラスになっている。こうした実施形態とした理由は担い手となる人員不足である。全学共通科目として実施した場合に主体となる人文系学科や理学部の教員の負担が重くなりすぎるという実施運営上の問題がまず挙げられる。また、それまで専門教育への導入として学部独自の初年次教育を実施しているので、その資産をもとに運営しやすい点も挙げられる。特筆すべきことは、それまで各学部の裁量のみに委ねる方式から全学部、全新入生を対象に一斉実施する方針に転換したことである。第２の特色は、全学部で使用する共通教材を開発していることである。多くの大学では 2 単位（15 回）であるが神戸大学では 1 単位（全 8 回）とし、全学共通部分（3 回分）と各学部が裁量する部分（5 回分）に分け、全学共通部分に対しては共通教材を作成し、これを各学部の裁量の範囲で使用している。共通教材は全 4 章からなり、（１）大学とはどんなところか、（２）大学のカリキュラムについて知ろう、（３）大学のリソースを最大限に活用しよう、（４）大学生活で求められるルールやマナーを知ろう、という構成である。本来初年次教育に含まれるべきスタディ・スキルとキャリアデザインを全学共通部分から除外して学部の裁量にした。第 4 回以降の授業内容については大まかな指針を示すにとどめ、各学部の判断に任せている。スタディ・スキルとキャリアデザインは各学部の必要性に合わせて構成するほうが良いという判断であろう。このようにみてくると、神戸大学の事例は理想的な初年次教育とはいえないかもしれない。しかし、教員削減のあおりを受けて初年次教育に手厚く多くの人員を割くことができない中小規模大学では参考になると思われる。中でも共通教材はじっくり作り込まれており、新入生の大学での学修の意識付けに大いに貢献していることが窺われる。

６．富山大学の初年次教育の現状

富山大学での初年次教育の取組状況を調査すると、全学の新入生に対して一律に実施されておらず、全国の大学での初年次教育の広がりに対して遅れている印象である。カリキュラムをみると、初年次教育に該当する科目は教養教育科目と専門科目の両方に開設されていて、特に専門科目で実施される内容には学系間でかなりの温度差がある点は課題と指摘しなければならない。表２「初年次教育の学部・学科別比較」を参照すると、全体的な傾向としては、文系学部（人文学部、経済学部、教育

	学びへの導入		スタディ・スキル系			キャリアデザイン	スチューデント・スキル系	大学の環境	備考
	大学とは 富山大学で学ぶことの価値，主体的・能動的学修への動機付け	カリキュラム・ 3ポリシーについて	情報の取得 図書館とネットワークを利用した文献の探し方	アカデミックライティング	グループ学習 異なる意見を聞く，発表する	キャリア教育導入 （自己分析，将来への方向性を考える）	大学生活への適応 大学生活のルール・マナーとリスク	修学支援環境について （図書館，ラーニングコモンズ，学生相談，短期海外外国語研修，留学プログラムなど）	
人文学部	△		△	△			△	△（図書館のみ）	「基礎ゼミナール」を12講座開設して少人数クラス，教員間の差がかなりある
経済学部	△		○	○		○	◎		「初年次教育」を3講座，統一された内容＊Progテストを利用
人間発達学部	○		○	○	○	○		○	「基礎ゼミナール」を2講座開設，全般的に網羅
理学部									
数学									「数学序論」で専門科目への導入
物理	○			○	○				「物理学入門」で実験，レポート，プレゼンテーション，学習態度
化学	○				○				「基礎化学セミナー」でグループで発表，討論
生物					○				「基礎生物学セミナー」でグループで施設見学
生物圏環境	○				○			○	「環境科学入門」で授業の受け方，ノートの取り方，教員との接点，助言教員
工学部									
電気電子工学					○				数学基礎は演習が中心，初年次教育の定義に当てはまらない
知能情報工学	△				○	○			助言教員制度を利用，少人数クラス
機械工学					○	○			新入生研修，助言教員制度利用
生命工学	○				○	○	○		「専門基礎ゼミナール」で教員の研究紹介，県内企業の見学，グループワーク
応用化学	○				○	○	○		「専門基礎ゼミナール」で教員の研究紹介，県内企業の講師による講演
都市デザイン学部	○				○				「入門ゼミナール」を2講座開設，ペーパーブリッジコンテスト
芸術文化学部	○	○	○	○		○			「芸文基礎演習A」で学び方を学ぶ，大学4年間の学修計画をレポートにまとめる
医学部									
医学科	○				○	○		△	「医療学入門」立山研修で学生職員間の交流，心肺蘇生法講習，実務経験教員による講義（キャリア教育） 「医学概論」では医学研究の紹介，図書館の利用，少人数でのPBL 「薬学概論」では学部長講義，教員メッセージ，研究室訪問，体験学習
看護学科	○				○	○			
薬学部	○				○	○			
教養科目									
「学士力・人間力基礎」	○	○	○	○	○	○	○	△（図書館のみ）	
「アカデミック・デザイン」						○			
「地域ライフプラン」						○			
「情報処理」			○	○					
参考：神戸大学 「初年次セミナー」	○	○				△	○	○	8回1単位，スタディスキルズを省いている "学習の記録"（ポートフォリオ）による自己管理

表２．初年次教育の学部・学科別比較

学部、芸術文化学部）では、すでに多くの初年次教育の課題がプログラムに組み込まれているのに対して、理系学部（理学部、工学部、都市デザイン学部、医学部、薬学部）では一部のプログラムしか実施されていない。文系学部でも、キャリアデザイン（「自己分析」から「将来への方向性を考える」プログラム)については実施されていないなど､すべてのプログラムが網羅されているわけではない。一方、理系学部においては、レポートの書き方（アカデミックライティング）等のスタディ・スキル系の指導が実施されていないようである｡その理由として考えられるのは､研究室配属後に学会発表、卒業論文発表のために研究室単位で指導しているからというものである。しかし、１年次に開講されているの多くの科目でレポートが成績評価に使われているので、スタディ・スキル系は配属前の学生にも必要である。また、理学部・工学部はキャリア教育を実施していることになっているが、その内容は専門教育への導入（研究室紹介等）が主な内容となっており、初年次教育で重視されるべきキャリアデザインは実施されていない。一方，将来の職業が明確な医学部（医学科，看護学科)・薬学部では，医療に携わる実務経験者による講義、体験実習（臨床および基礎研究、介護体験）を行い、キャリアについて意識させる工夫を行っている。このように、学部間で初年次教育の実施内容がバラバラになっており，全学的な取り組みは実施されていない。初年次教育に対する大学としての方針が決められていないためにその位置づけが曖昧になっており、初年次教育の意義や取り組むべき課題について全学に周知されていないことが原因であろう。専門教育で充分な初年次教育が実施されていない現状においては、全学共通教育である教養教育科目に体系的な初年次教育が求められる。教養教育で実施されている初年次教育に該当する科目と概要を挙げる｡「学士力・人間力基礎」は初年次教育に含まれるべき内容がほぼ含まれている代表的な科目といえる｡「アカデミック・デザイン」と「地域ライフプラン」は将来の職業を意識させるキャリア教育科目である。残念なことに、これらの科目は選択科目で、いずれも現在１クラスだけしか実施されていない。唯一「情報処理」だけが１年生全員に対する必修科目であり、スタディ・スキル系の情報リテラシー、アカデミックライティング，プレゼンテーションが含まれている。

７．富山大学における初年次教育の方向性

神戸大学における「初年次セミナー」導入までの状況と富山大学の状況は似ていて、初年次教育の担い手となるべき全学教養組織（富山大学教養教育院）が充分な陣容を整えていない。その現状を踏まえると、今後、新規に初年次教育に必要なすべての要素を含む必修科目を設置するということは現実的ではないように思われる。現在実施されている初年次教育を活かしながら、足りない点や必要な内容を追加していくことが現実的な方向と考えられる。

そこで、初年次教育として標準的だと考えられる内容を以下に示したい。ただし、他大学に倣って標準的なものを準備するというのではなく、各項目の中で“自立的な学修者を育てる”という視点から内容を精査していく必要があろう。

（1）学びへの導入

大学という場での学修について、特に受動的な学修から主体的な学修への転換を促す。また、カリキュラムや 3 ポリシーの説明を行い、卒業までに何を身につけるべきかを示す。学系における教育の指導的立場にある教員からの助言があることが望ましい。講演・説明のみでは受動的となるので、小グループを作って学生間で発言しあう場を与えるなど、能動的なスタイルを取り入れることが望ましい。

（2）スタディ・スキル系

レポートの書き方いわゆるアカデミックライティングを中心とした内容である。情報の取得方法として、図書館での文献の探し方とネットワークの利用の仕方、当然コンピューターの操作（コンピューターリテラシー）が含まれる。さらに発展的なスキルとして、クリティカルシンキング、ディスカッションの技法、プレゼンテーション、文章表現等の説明や具体的な実践による訓練が含まれることが望まれる。アカデミックライティングの全般的な指導だけなら講義形式で行うことは可能だが、添削指導まで行うときは多人数の教員の出動が求められることになる。

（3）スチューデント・スキル系

大学生に求められる一般常識や態度の涵養、学生生活における時間管理や学修習慣、健康の維持、リスク（カルト教団、薬物等）回避、ネット利用のリスク等を説明する。

（4）キャリアデザイン

自己理解、社会理解（職業理解）、環境への働きかけがキャリアデザインの 3 要素である。これに加えて、個人やグループ活動によって他者への理解を深めることも含まれる。富山大学では初年次のキャリア教育の重要性に関する認識が全学的に共有されていない。学内にはキャリアコンサルティングの有資格者がいるのに、カリキュラムとの連携ができていない。そのために初年次のキャリア教育が体系的に実施されていない。早急にこの分野の充実が求められる。

（5）大学の環境

図書館、ラーニングコモンズ、学生相談、短期海外外国語研修、留学プログラム等の大学の修学支援の環境を紹介する。

神戸大学の「初年次セミナー」では共通テキストを用いて、学びへの導入、スチューデント・スキル、大学の環境、自校教育を実施し、スタディ・スキル系とキャリア教育は学部の責任で実施している。このやり方は本学においても参考になる。本学では、全学必修科目の「情報処理」でスタディ・スキル系を実施しているので、これ以外の内容を精査し、全学一律で実施できないか検討を進めるべきである。実施運営の人員不足は、共通テキストと講義ビデオを活用すれば補うことができる。これらを学内の組織（教養教育院、学生支援センター、就職キャリア支援センター、保健管理センター、図書館）が協力して作成し、実施運営上の責任は学部とし、学部の教員中心に実施すれば無理なく実施できる体制となるであろう。最後に強調しておきたいのは、全学一律の初年次教育を実施するためには、教養教育院の組織だけでは難しく、全学の組織・学部の協力がなければ実施できない。そのた

めには、初年次教育の重要性を周知して全学的な協力体制を構築することが急務である。

参考文献

東俊之、栃内文彦（2017）初年次教育科目「修学基礎」の展開と課題、KIT Progress、No.26、 pp.169 - 178

初年次教育学会編（2018）進化する初年次教育、世界思想社

近田政博（2016）神戸大学「初年次セミナー」の合意形成過程、神戸大学大学教育推進機構『大学教育研究』第24 号、pp.21－52

中央教育審議会（2008）学士課程教育の構築に向けて、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm

中央教育審議会（2014）新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm

濱名篤（2007）日本における初年次教育の位置づけと効果、カレッジマネジメント、No.145、pp.4 - 9

松本浩司（2010）初年次教育におけるキャリア教育の意義と課題、教養と教育、10 巻、pp.18 - 23

文部科学省（2021）令和元年度の大学における教育内容等の改革状況について、https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00008.htm

山田礼子（2012）大学の機能分化と初年次教育、日本労働研究雑誌、No.629、 pp.31 – 43

谷井一郎

富山大学教養教育院